研修医の声

人を助ける仕事とは？

厚生連柏崎総合医療センター
三　浦　子　路

「人を助ける仕事がしたい」－医師講話後の小学６年生の言葉に、あなたはどう返すだろうか？

私の名前は三浦子路。旭川医大を卒業後、１年間国試浪人し、2024年４月から神奈川県の湘南藤沢徳洲会病院にて、'25年３月から柏崎総合医療センターにて、臨床初期研修を受けている。

元々、科学よりも歴史が好きで、白衣よりもネクタイに憧れてきた私は大学入学後も臨床に興味を持てず、高学年で、公衆衛生という選択肢に出会った。その道を進むべく、北海道を飛び出し、新潟県へやって来ている。

国試浪人や藤沢での研修を通じて、臨床の面白さに気付き、柏崎での研修や行政インターンシップを通して、今度は公衆衛生と臨床が切っても切り離せないことを学んだ。

話は戻り、小学校の医師講話。市から医療センターへの依頼だった。テーマは「お医者さんの仕事」と「お医者さんになるために必要なこと」。研究や行政、教育や司法など、治療以外にも広がる医師の仕事の多様性、そして小学校卒業から医師になるまでの流れを説明した。

最初３名だった「お医者さんになりたい人」が、講義後に10名に増えたのは嬉しかったが、中でも一際熱心にたくさん質問してくる１人の男子児童が放ったのが冒頭の言葉である。もちろん本当に医師になるならいつまでもその熱意を持っていてほしい。だが、綺麗事だけで終わらせたくない。そこで私はこう答えた。「命を救うのはお医者さんだけじゃないし、どういう仕事だって人を助けてるんだよ。だから、どの仕事にも敬意を払って、その上で、お医者さんになるのなら、『お医者さんにしかできないこと』をやってね。」

思えば、刑事や探偵だって人の命を救っているし、銀行員や教員、鉄道員だって誰かしらの役に立っている。医師免許があって初めてできることこそ本来の医師の役割だろう。

自分の言葉に一瞬酔い痴れた直後、ふと思った。－果たして、今の自分が『医師にしかできないこと』をやれているか？この先、自分がやる仕事が医師免許を持つに値するのだろうか？

研究であれ、臨床であれ、行政であれ、目の前の仕事をこなすのは大事だが、医師の視点で、問いを立て、仮説を立て、検証するのを忘れたらロボットと同じだ－男子児童へ向けた自分の言葉が自分へ返ってきた瞬間だった。

初期研修も残り僅か。

小学校での医師講話の様子